

日本人学習者による英語の長距離wh移動の習得： 部分的wh移動とwh複写に焦点を当てて

野 地 美 幸*

(平成31年2月28日受付；平成31年4月22日受理)

要 旨

日本人学習者は第二言語 (L2) 英語の (長距離wh移動を伴う) 複合wh疑問文を習得する際に、主節の文頭に作用域標識 (scope marker) のwhatが、そして埋め込み文の文頭に疑問詞が現れるWhat do you think what present he likes best?のような文を産出することが報告されている (Yamane, 2003; Schulz, 2011)。このような部分的wh移動は母語にも目標言語にも存在しないがドイツ語の方言で許容されていることから、L2が普遍文法 (universal grammar) によって制限されている可能性が取り沙汰されている。本研究は、日本人英語学習者が、部分的wh移動と並んでドイツ語で許容されるもう一つのwh複写 (wh-copying) の様相を呈するのかを調べた。Thornton (1990) に倣った誘導発話タスクに参加した19名の日本人英語学習者の産出資料を分析した結果、少数ではあるが部分的wh移動とwh複写という日本語にも英語にも見られない逸脱が観察された。そしてこの逸脱が自然言語の可能な選択肢の範囲内に収まるものであることを示唆した。

KEY WORDS

Japanese learners of English 日本人英語学習者
partial wh-movement 部分的wh移動
second language acquisition 第二言語習得

long-distance wh-movement 長距離wh移動
wh-copying wh複写

1. はじめに

(1) のような英語の複合wh疑問文は、wh句が主節の文頭に現れているが、埋め込み文内の動詞likesの目的語として解釈される。この構造的依存関係は、生成文法では、従来、埋め込み文内の目的語位置から主節の文頭の位置までの長距離wh移動によって捉えられてきた。L2英語学習者は、このような文境界を越えた長距離wh移動を習得する際に様々な誤りを生み出すことが報告されている (Radford & Yokota, 2006; Schulz, 2011; Wakabayashi & Okawara, 2003; Yamane, 2003)。(2a) のような、埋め込み文に見られる「倒置の過剰汎化 (over-generalization)」, (2b) のような「部分的wh移動」, また、部分的wh移動現象の中でも (2c) のような「文頭のwh欠損 (no top wh)」である。

- (1) What present do you think she likes?
(2) a. What color do you think **does** she like? (Radford & Yokota, 2006, p. 76)
b. **What** do you think **what present** he likes best? (Yamane, 2003, p. 52)
c. **Do** you think **what Mr. Yellow** eat? (Wakabayashi & Okawara, 2003, p. 232)

(2) は全て日本人英語学習者 (高校生, もしくは大学生) が産出した疑問文であるが、このような誤りがなぜ生じるのかその原因は二つの問題と結びつけられてきた。Radford and Yokota (2006) は、その原因を、L2の長距離wh移動が連続循環性 (cyclicity) や局所性 (locality) といった性質を備えているのかという問題と結び付けて検討を行っている。倒置の過剰汎化も部分的wh移動もwh句が連続循環的に、即ち、埋め込み文のCPの指定部を経由して主節のCP指定部へ移動したと分析するとうまく説明できることから、wh移動の連続循環適用を支持する証拠と見なしているのである。実際、(2a) と類似する埋め込み文での倒置がペルファスト英語で許容されており、倒置は (3) のようにwh句が連続循環的に移動したCPでのみ起こるとされている (Henry, 1995, pp. 118-119)。

- (3) a. *Who do you think did John convince did Mary go?
b. Who did you think did John convince that Mary went?

(3a) は、どちらの埋め込み文でも倒置が起こっており非文となるが、(3b) ではwh句の元位置 (convinceの目的語の位置) を含むthink の補文では倒置が起こるが、convinceの補文内では起こっていないため容認される。

(2) の誤りの原因と絡むもう一つの問題は、普遍文法が関与するのかわである。Yamane (2003) は、英語の目標文から逸脱した、また日本語にも存在しない (2b) のような部分的wh移動に類似する現象がドイツ語の北部方言で許容されていることから、この現象を、L2の習得が普遍文法の制限を受ける、すなわち普遍文法が許容する範囲内で行われていることを示唆するものだとしている。これに対してSchultz (2011) は、この現象は前半のWhat do you thinkと後半部分がそれぞれ別の文として産出されている可能性が拭えないこと、また前半部分は塊として産出されている可能性があることを踏まえ、複数のタスクを組み合わせて実験を行った結果、「一貫して」部分的wh移動 (彼女の論文では「wh作用域標示 (wh-scope marking)」) を許している日本人英語学習者がいたことを明らかにしながらも、この現象は普遍文法の関与を示すものではなく解析上の困難を回避するストラテジーを駆使したものであるという立場を採っている。

本研究ではこの二つ目の普遍文法の関与という観点に着目したい。ただし、複合wh疑問文形成に関してドイツ語の方言で許されているもう一つの選択肢であるwh複写に焦点を当てる。McDaniel (1989, p. 569) は、ドイツ語には英語のような長距離wh移動 ((4a)), 部分的wh移動 ((4b)) と並んでwh複写 ((4c)) という三つの選択肢が可能な方言があると指摘している。

- (4) a. Mit wem glaubt Hans dass Jakob jetzt spricht?
with whom think Hans that Jakob now talk
“With whom does Jas think that Jakob is now talking?”
b. Was glaubt Hans mit wen Jakob jetzt spricht?
what think Hans with whom Jakob now talk
“WHAT does Hans believe with whom Jakob is now talking?”
c. Wen glaubt Hans wen Jakob gesehen hat?
whom think Hans whom Jakob seen have
“Whom does Hans think whom Jakob saw?”

また、wh複写は、複数の形態素から成るというのであればあらゆるwh句で可能とされる (Fanselow & Mahajan, 2000, p. 22)。 (5a, b, c) のwh句はいずれも単一の形態素でできており、wh複写として容認されるが、 (5d) は二つの形態素からできているwh句の複写で容認されず、 (5c) と最小対立を成している。

- (5) a. wie glaubst Du wie sie das gelöst hat
how believe you how she that solved has
“How do you believe that she has solved that?”
b. warum glaubst Du warum sie das getan hat
why believe you why she that done has
“Why do you believe she has done this?”
c. woran glaubt Du woran sie denkt
of-what believe you of-what she thinks
“What do you believe that she thinks of?”
d. *an wen glaubt Du an wen sie denkt
of-what believe you of-what she thinks
“What do you believe that she thinks of?”

日本人英語学習者に関しては、Yamane (2003) とRadford and Yokota (2006) のいずれもがそれぞれwhose ~ や which ~ のような複合wh句についてwh複写の産出を確認していない。一方、Yamane (2003) は、文法性判断タスクで (6a) の単純wh句の複写文の容認度 (2 択) が30%であったこと、そして (6b) の複合wh句の複写文の容認度 (1.7%) と比べて有意に高かったことを報告し、部分的wh移動現象がドイツ語方言の様相を呈しているという彼女自身の主張に支持を与えている。

- (6) a. Who(m) do you think who(m) he saw?
 b. Whose ball do you think whose ball is in the basket?

もしYamane (2003) が主張するように日本人学習者のL2英語に見られる部分的wh移動がドイツ語の方言と同様のもので、L2英語の発達に普遍文法が制限を加えているのであれば、単純wh句の長距離移動の場合日本人英語学習者は産出面でもwh複写現象を示すはずである。本研究はこの予測の検証を試みる。

2. 理論的背景

最初に、日本人英語学習者にとっては目標言語となる英語と、母語となる日本語の複合wh疑問文について取り上げる。英語は、(7) のようにwh句が(下線で示された)元位置から文頭の位置に移動し、主節のCP指定部まで移動すれば主節の疑問文が、埋め込み文のCP指定部まで移動すれば関係疑問文が形成され、wh句が作用域を決定している。一方、日本語では、(8) のようにwh句が元位置に留まることが可能で、wh句に近い「か」がQ標識としての機能と作用域を決定する働きをする(西垣内, 1999)。したがって、「か」が主節のCPの主要部に現れている(8a)は主節の疑問文として、「か」が埋め込み文のCPの主要部にも現れている(8a)は関係疑問文として解釈されることになる。

- (7) a. [_{CP} What did John tell you [_{CP} that Tom bought ____]]?
 b. [_{CP} Did John tell you [what Tom bought ____]]?
 (8) a. [_{CP} [_{CP}和子は美紀が何を買ったと] 言いましたか]?
 b. [_{CP} [_{CP}和子は美紀が何を買ったか] 言いましたか]?

英語の長距離wh移動は、従来、様々な島の効果 (island effects) 等を説明するために埋め込み文のCP指定部を通して連続循環的に移動すると考えられてきた。そして、前節で見たドイツ語の部分的wh移動やwh複写(で埋め込み文のCP指定部にwh要素が現れること)がそれを支持すると考えられてきた。しかしながら、近年、この埋め込み文のCP指定部へのwh移動とそこから主節のCP指定部へのwh移動は別個のメカニズムが働くという想定の下で新たな分析が提示されている(Chomsky, 2000; Bošković, 2007)。Chomsky (1995)で仮定されているように、移動(内部併合+コピー形成)が機能範疇(functional category)内にある素性によって駆動される(feature-driven)とすると、埋め込み文でCP指定部へのwh移動を駆動する素性がCに存在しなければならず、[+wh]のような素性だとすると本来(主節の動詞の選択制限により)CPの主要部は[-wh]であるはずであるので矛盾する素性を持ち込むことになるからである。また、ドイツ語ではその矛盾した素性が音声的に具現化されることになるからである。本論文では、Chomsky (2008)やMacCloskey (2002)等に従って、wh移動を駆動する何らかの素性が主節と埋め込み文のCに別個に存在すると仮定することにする。また、英語とドイツ語のwh句の音声的実現に関する違いに関しては、Felser (2004)のように書き出し(Spell-Out)を受ける位相(phase)にかかる制限の違いと捉えるのか、Bailer (2014)のように書き出し時点でのwh句の連鎖(Chain)の先頭部(head)と末尾部(tail)のステータスの違いと捉えるのか、その根本的な原因は追究せず、従来通りwh句の連鎖の音声的実現に関するパラメーターが存在し、その値が各言語で異なると仮定することにする。

3. 本研究

3.1. 参加者

19名の日本人英語学習者が実験に参加した。そのうち17名が教員養成系大学に通う大学生、2名が同じ大学の大学院生で、参加者の平均年齢は21.47歳、平均英語学習年数は11.00年であった。ほとんどの参加者は英語圏での滞在経験はなかった。1名のみ半年未満の滞在経験を有していたが、本研究の目的から判断してこの経験が実験結果に及ぼす影響は考え難いと判断し、分析の対象とすることにした。

3. 2. 誘導発話タスク

参加者には一人ずつThornton (1990) に倣った誘導発話タスクに参加してもらい、コンピュータ画面に映し出された、文脈付きの日本語の複合疑問文を英語に訳してもらった。その後wh句を適切に埋め込み文内の要素として解釈したかどうかを確認するために設定した問に答えてもらった。音声はコンピュータでファイルに録音し、後で文字化した。

刺激例おおび英語の目標文と正答は(9, 10)に示す通りである。「何を」か「なぜ」の二種類のwh句を埋め込み文に含む文それぞれ5文ずつ用意した。目標文の主節の動詞はthinkだけでなくsay, considerを加え、また主節の主語は3人称単数・複数の名詞を用い、倒置が起こった場合にdo, does, didが含まれるよう意図して日本語の刺激文を用意した。参加者には、練習問題2問に答えてもらった後、テスト問題10問に(埋め込みのない「何を」・「なぜ」の疑問文10問を含む)フィラー12問を加え合計22問をセミランダムイズして提示し、答えてもらった。

(9) whatの刺激例：

美紀が何かをペットに飼っているようで自慢げです。

彼女は飼っている動物をDavidにそっと教えました。

問1：美紀は何をペットに飼っていると言ったのでしょうか？()内の表現を使ってDavidに英語で聞いてみましょう。(Miki, say, have, she, as a pet, what)

答：Hey, David! _____?
(目標文：What did Miki say that she had as a pet?)

問2：この状況で下のA, Bが質問の答えとして適切かどうかを○か×で答えてください。

- A. She has a bird. (○)
B. She is proud of it. (×)

(10) whyの刺激例：

Dianaがなぜか楽しみにしていたピクニックに行けないようです。

お父さんのBobはピクニックに行けない理由をKarenに話しました。

問1：Bobは、Dianaがなぜピクニックに行けないと言ったのでしょうか？()内の表現を使ってKarenに英語で聞いてみましょう。(Bob, say, can, go, not, Mary, why, on a picnic)

答：Hey, Karen! _____?
(目標文: Why did Bob say that Mary couldn't go on a picnic?)

問2：この状況で下のA, Bが質問の答えとして適切かどうかを○か×で答えてください。

- A. Because she caught a cold. (○)
B. Because Karen wanted to know that. (×)

目標文のリストは下記の通りである。

- (11) **What does** Mari **consider** that the solution of the problem needs?
What do Yoichi's parents **think** that their son doesn't know?
What did Miki **say** that she had as a pet?
What does Miki **think** that Ken read in the library?
What did Cindy **say** that David was expecting for Christmas?
Why does Yumi **think** that Miki didn't eat the cake?
Why do Yuka's parents **consider** that their daughter has made a big progress in swimming?
Why did Bob **say** that Mary couldn't go on a picnic?

Why does Yumi think that Haruki got on a wrong train?

Why did Kathy say that the little boy was crying up a tree?

予測としては、もし学習者がドイツ語のように部分的wh移動のみを示すとすれば「何を」を用いた刺激文でWhat, …, what, …という文が、また「なぜ」を用いた刺激文に関してはWhat … why …の文が算出されるであろう。一方、学習者が部分的wh移動に加えてwh複写も可能とするのであれば、「何を」の刺激文に関してはWhat … what …という文（この場合wh移動かwh複写かは曖昧となるが）を、「なぜ」の刺激文に関してはWhat … why …の文に加えて Why … why …の文が算出されるであろう。つまり、日本人英語学習者の先行研究で報告されているように部分的wh移動が確認されたとして、wh複写も認められるかどうかに係わる決定的な違いはWhy … why …の文の存在ということになる。

3.3. 分析手順

参加者が算出した「複合wh疑問文」を「目標文」「部分的wh移動」「wh複写」「その他」の4種類に分類した。まず、ここで「複合wh疑問文」とは埋め込みを伴うwh疑問文で、(12)のように疑問詞はあってもその元位置が含まれると考えられる埋め込み文が確認できないものは「複合wh疑問文」から除外した。「何を」に対してwhatを、「なぜ」に対してwhyを使用していない文も分析の対象外とした。また、設定した問2の問題に正答が得られなかったものに関してもwh句を埋め込み文内の要素と解釈していない可能性があるので分析から除外した。ただし、wh句の生じている位置は問題にせず、(16a)のようにwh句が元位置に留まっている文、(16b, c)のようにwh句が埋め込み文の文頭の位置に現れている文は倒置の有無にかかわらず「複合wh疑問文」とした上で「その他」に分類した。

次に、「目標文」に関しては、wh句が文頭に現れ、埋め込み文内に主語と述語が現れている(13a)のような文を「目標文」と見なし、(13b)のように主節で倒置が確認されなくても「目標文」として数えた。また、(13c)のように埋め込み文で倒置が起こっている文も「目標文」と見なした((13b)のベルファスト英語を参照)。ただし、(16d)のようにwh句が文頭に現れていても、主語との間に助動詞以外の要素が現れている場合は「その他」に分類した。

「部分的wh移動」と「wh複写」はそれぞれ(14)と(15)のような文であるが、作用域標識と考えられるwhatが文頭に現れ、wh句が埋め込み文の第一要素として表れているものを「部分的wh移動」、同じwh句が主節と埋め込み文の文頭にそれぞれ現れているものを「wh複写」と見なした。ただし、どちらも(16e)のように埋め込み文でも主語・助動詞倒置が起こっているものに関しては、二つの独立した文の可能性もあるため、「その他」として数えた¹⁾。wh句がwhatの場合は作用域標識なのか疑問詞なのか曖昧になり、「部分的wh移動」と「wh複写」の両方の解釈が可能なので「部分的wh移動・wh複写」として分類した。したがって、純粋に「部分的wh移動」と「wh複写」を区別したのはwhyの場合のみとなる。

(12) a. Why Yumi eat not the cake?

b. What Mari consider need of the problem the solution?

c. What does Mari consider she, she need to, she need the solution of the problem?

(13) 目標文

a. What did Cindy say David be expecting?

b. … what Miki think Ken read in the library?

c. Why their, why Yuka's parents consider does their daughter, did their daughter have made a big progress in swimming?

(14) 部分的wh移動

a. What did she say what Miki has as a pet?

b. What did Bob said why Dianna could not go on a picnic?

(15) wh複写

a. Why does Yumi think why Miki doesn't eat the cake?

b. Why did Cathy say why the boy is crying?

(16) その他

a. Did Cindy say that David was expecting what for Christmas?

b. (Do) Yoichi's parents think what their son not know?

c. Cindy says what are David expecting for Christmas?

- d. Why did say Bob Diana cannot go on a picnic?
e. What did Cathy said why is the boy crying up a tree?

3. 4. 結果

前節で示した分析手順に従って19名の参加者の産出データを分析した結果, 「複合wh疑問文」を全く産出しなかった学習者が1名いたことが判明した。残り18名(平均年齢: 21.39; 平均英語経験年数: 11.06)の複合wh疑問文の分析結果は表1の通りである。

表1. 日本人英語学習者の複合wh疑問文の産出パターン

	目標文	部分的wh移動・wh複写	部分的wh移動	wh複写	その他
what	26	2	0	0	46
why	26	0	3	4	51
計	52 (33%)	2 (2%)	3 (2%)	4 (3%)	97 (62%)

最も多く観察されたのは「その他」で, その内訳は(16a)のタイプの文が3(2%), (16b, c)のタイプの文が92(58%), (16d, e)のタイプの文がそれぞれ1(1%)であった。次いで多かったのが「目標文」であった。「部分的wh移動」も「wh複写」も数はごく限定的ではあるが産出が確認された。具体的にはそれぞれ下記に示す通りである。

(17) 部分的wh移動・wh複写

- What did she say **what** Miki has other pet?
What did Yoichi's parents think **what** their son doesn't know?

(18) 部分的wh移動

- What did Bob said **why** Dianna could not go on a picnic?
Why, what, **what** did Bob say **why** Diana cannot go on a picnic?
What did Cathy say **why** the boy is crying up a tree?

(19) wh複写

- Why does Yumi think **why** Miki doesn't eat the cake?
Why does Yumi think **why** Miki did not eat the cake?
Why di, did Bob say **why** Diana didn't go,
Why did Cathy say **why** the boy is crying?

先行研究で産出が報告されていた「部分的wh移動」に加えて, 「wh複写」が, そしてwhyの「wh複写」が日本人英語学習者で初めて観察されたことになる。

個人の結果に関しては, 18名のうち6名から「部分的wh移動」・「wh複写」現象が確認された。2名がwhyの「wh複写」現象のみを示し, また別の2名がwhyの「部分的wh移動」現象のみを示した。残り2名はwhatの「部分的wh移動・wh複写」現象を示し, そのうち1名からはwhyの「wh複写」文の産出も確認された。

3. 5. 考察

実験の結果, 部分的wh移動とwh複写の両方が確認されたこと, そしてまたwhyのwh複写が確認されたことは, 日本人英語学習者が複合wh疑問文を習得する過程でwh複写という現象を示す時期があることを示唆している。ただし, 個人の結果を考慮すると, whyに関しては同じ学習者で部分的wh移動とwh複写の両方の現象を示した学習者はいなかったことになる。whatは部分的wh移動とwh複写が同形となるため, 全体としては, 本研究の参加者は部分的wh移動かwh複写のどちらかの現象を示していた可能性がある。したがって, 部分的wh移動とwh複写の両方の現象を示す学習者がいるのかに関しては, さらにデータ収集を進める必要があるであろう。

いずれにせよ日本人英語学習者に関して母語にもそして目標言語にもない「wh複写」の産出が確認されたことは彼らのL2英語が自然言語のもう一つの可能な選択肢であるドイツ語の特徴を示している可能性がある。Bley-Vroman (1990) は外国語も言語であると述べているが, どこまでL2が普遍文法が可能とする言語の様相を呈するのか, 又そ

の範囲を逸脱するのかを明らかにするためには一つ一つの現象を丹念に調べていく必要がある。Slavkov (2015) は (wh移動が随意的な) フランス語もしくは (英語と同様にwh移動が義務的な) ブルガリア語が母語の大人の英語学習者の複合wh構文の産出を調べ、どちらの学習者に関しても割合は異なるものの、母語にも英語にも許されていないwh複写の産出例があったと報告している。本研究で少数ではあるが日本人英語学習者についてもwh複写が確認されたことで、L2英語学習者の選択肢の一つとして常にwh複写がある可能性があり、その原因として普遍文法が関わっているという可能性が示唆される。

4. 結論

本研究では、日本人英語学習者がドイツ語のように部分的wh移動に加えてwh複写も可能とするのであれば、whatに関してはWhat … what …という文が、whyに関してはWhat … why …の文に加えて Why … why …の文が産出されるであろうという予測を立てて検証を行った。実験の結果、予測通りWhat … why …の文に加えて Why … why … の文が確認された。したがって、日本人学習者のL2英語が部分的wh移動とwh複写を可能とし、ドイツ語のような 振る舞いをするとの示唆が得られたことになる。

今後この問題を更に追及し、どの程度ドイツ語的なのかを明らかにするためには、whyだけでなく、他の (単一の形態素から成る) wh句でもwh複写が見られるのか、また単純wh句と複合wh句との間でwh複写の可能性に違いが見られるのかを調べ、日本人学習者のL2英語で今回確認されたwh複写現象がドイツ語に見られるwh複写と同じ特性を示すのか慎重に見極める必要があるであろう。

注

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (C) (課題番号18K00865, 研究代表者: 野地美幸) の助成を受けて行われたものである。

¹⁾ 埋め込み文内で倒置のある「wh複写」の文は実際には観察されなかった。

参考文献

- Baier, N. (2014) Long distance wh-movement in Seereer: Implications for intermediate movement. A handout presented at the 38th Pacific Linguistics Conference. Retrieved from:
http://linguistics.berkeley.edu/~nbbaier/documents/baier_plc38_handout.pdf
- Bley-Vroman, R. (2009). The evolving context of the fundamental difference hypothesis. *Studies in Second Language Acquisition*, 31, 175-198.
- Bošković, Ž. 2007. On the locality and motivation of Move and Agree: An even more minimal theory. *Linguistic Inquiry*, 38, 589-644.
- Chomsky, N. (1995). *The minimalist program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, N. (2000). Minimalist inquiries: The framework. In Martin, R., Michaels, D. & Uriagereka, J. (Eds.) *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik* (pp.89-156). Cambridge, MA: MIT Press.
- Fanselow, G. & Mahajan, A. (2000). Towards a minimalist theory of wh-expletives, wh-copying and successive cyclicity. In Lutz, U., Müller, G. & von Stechow, A. (Eds.) *Wh-scope marking* (pp.195-230). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Felser, C. (2004). Wh-copying, phases, and successive cyclicity. *Lingua*, 114, 543-574.
- McCloskey, J. (2002). Resumption, successive cyclicity and the locality of operations. In S. Epstein & T. D. Seely (Eds.), *Derivation and explanation in the minimalist program* (pp.184-226). Malden, MA: Blackwell.
- McDaniel, D. (1989). Partial and multiple wh-movement. *Natural Language and Linguistic Theory*, 7, 565-604.
- 西垣内泰介 (1999). 『論理構造と文法理論：日英語のWH現象』。東京：くろしお出版。
- Radford, A. & Yokota, H. (2006). UG-constrained wh-movement in Japanese learners' English questions. *Second Language*, 5, 61-94.
- Schultz, B. (2006). Syntactic creativity in second language English: Wh-scope marking in Japanese-English interlanguage. *Second Language Research*, 27, 313-314.
- Slavkov, N. (2015). Long-distance wh-movement and long-distance wh-movement avoidance in L2 English: Evidence from

- French and Bulgarian speakers. *Second Language Research*, 31(2), 179-210.
- Thornton, R.J. (1990). Adventures in long-distance moving: The acquisition of complex wh-questions. Unpublished PhD dissertation, University of Connecticut, CT, USA.
- Wakabayashi, S. & Okawa, I. (2003). Japanese learners' errors on long distance wh-questions. In Wakabayashi, S. (Ed.) *Generative approaches to the acquisition of English by native speakers of Japanese* (pp. 215-245). New York, NY: Mouton de Gruyter.

The Acquisition of English Long-Distance *Wh*-Movement by Japanese Learners:

Focusing on the Presence of Partial *Wh*-Movement and *Wh*-Copying

Miyuki NOJI*

ABSTRACT

This study of first language (L1) Japanese adult learners acquiring English as a second language (L2) investigates how they acquire complex questions with long-distance *wh*-movement. Analyses of spoken production data show that they deviate from the target and use partial *wh*-movement and *wh*-copying, which can be seen in some adult native languages such as German. It is suggested that the deviations are within the range of possible options sanctioned for natural languages.

* Humanities and Social Studies Education